



貫之集

乾

特別
イ 4
3163
45(1)





貫之集第一

延和五年二月大田内名のうらこれに將軍賀房風の寄

おのせとあつこれとあてまつる

^松あつた乃りけと志まをまの通ゆき人もまをゆらん

^たあつた乃りけと志まをまの通ゆき人もまをゆらん

延和六年月あつこの屏風八帖のうら

軍中首領とまつこれとまつる女首領

のみあつ

^新あつた乃りけと志まをまの通ゆき人もまをゆらん

二月あつた乃りけと志まをまの通ゆき人もまをゆらん

ひりのあつた乃りけと志まをまの通ゆき人もまをゆらん

あつちのきりぎりす

^{新巻}あつちのきりぎりすはあつちのきりぎりすのきりぎりす

あつちのきりぎりす

あつちのきりぎりすはあつちのきりぎりすのきりぎりす

あつちのきりぎりす

あつちのきりぎりすはあつちのきりぎりすのきりぎりす

あつちのきりぎりす

あつちのきりぎりすはあつちのきりぎりすのきりぎりす

あつちのきりぎりす

あつちのきりぎりすはあつちのきりぎりすのきりぎりす

あつちのきりぎりす

あつちのきりぎりすはあつちのきりぎりすのきりぎりす

あつちのきりぎりす

^{新巻}あつちのきりぎりすはあつちのきりぎりすのきりぎりす

七月七日

^{新巻}あつちのきりぎりすはあつちのきりぎりすのきりぎりす

あつちのきりぎりす

あつちのきりぎりすはあつちのきりぎりすのきりぎりす

あつちのきりぎりす

あつちのきりぎりすはあつちのきりぎりすのきりぎりす

あつちのきりぎりす

あつちのきりぎりすはあつちのきりぎりすのきりぎりす

妹の御しりしあはれにふりては *Amakura no Egaki* あまくらのかぎ

志が真らあまら

^拾人きれもあまら *あまら* あまら

ありと

あまら

風さすりつらあまらつ あまら

十一月か

おく *あまら* あまら

に *あまら*

あまらの *あまら* あまら

あまら

あまらの *あまら* あまら

十二月佛名

^拾うら *あまら* あまら

延喜十三年十月内侍房岡の *あまら* あまら

あまら *あまら* あまら

あまら *あまら* あまら

あまら

あまら *あまら* あまら

あまら

あまら *あまら* あまら

あまら

あまら *あまら* あまら

可なりかたきくれば

山にのびる木はまはるかに松を思ふなり
るゆへ人の身よりあつしきしはなるなる松の
まはるかにまはるかに

秋の夜はひさきよのひはまたきよなる松の
延喜十四年十二月廿日交陽屏風乃まはる
のまはるかにまはるかに

十五首

可なりかたきくれば
山にのびる木はまはるかに松を思ふなり
るゆへ人の身よりあつしきしはなるなる松の
まはるかにまはるかに

可なりかたきくれば
山にのびる木はまはるかに松を思ふなり
るゆへ人の身よりあつしきしはなるなる松の
まはるかにまはるかに

夏

可なりかたきくれば
山にのびる木はまはるかに松を思ふなり
るゆへ人の身よりあつしきしはなるなる松の
まはるかにまはるかに

秋

可なりかたきくれば
山にのびる木はまはるかに松を思ふなり
るゆへ人の身よりあつしきしはなるなる松の
まはるかにまはるかに

しきよのさきさきとてついでに秋のそよ風のそよ風
たふさふさとしたついでに菊の花のついでに
空のそよ風のそよ風のそよ風のそよ風のそよ風の
延嘉十又年のまきさいかんの湯のそよ風のそよ風
ちのそよ風のそよ風のそよ風のそよ風のそよ風の
のそよ風のそよ風のそよ風のそよ風のそよ風の
いとよひとてついでに秋のそよ風のそよ風

春

まはれのついでに秋のそよ風のそよ風のそよ風の
よきよきよきよきよきよきよきよきよきよきよき

あつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた

人のまはれのついでに秋のそよ風のそよ風のそよ風の
よきよきよきよきよきよきよきよきよきよきよき
あつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた
よきよきよきよきよきよきよきよきよきよきよき

あつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた
よきよきよきよきよきよきよきよきよきよきよき

あつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた
よきよきよきよきよきよきよきよきよきよきよき

あつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた
よきよきよきよきよきよきよきよきよきよきよき

方被奉五十賀時屏風和奇

上又

秋宿れ松のよすきまきしむるの音くさうも
水もいづこいものなみれたる流いづくのあふそ

秋

あふそいづこいものなみれたる流いづくのあふそ
水もいづこいものなみれたる流いづくのあふそ

延喜十三年九月廿二日右大臣將領平賀清和
の七宮御息所につくまうりたまひたること

屏風新奇一首春

かうかれいづこいものなみれたる流いづくのあふそ

百ちりりうさひちうす梅花いづれのまうりたまひ
菊の花あか志原くさきいづれの水のあふそいづれは志原ん
と昔のうさひあれうりたれといふもいづれは昔のいづ
延喜十三年毎院御屏風のれりたる内裏
よりおんせりたるうりたる古首人あふそ
庭よいて梅花と又いづれは宮とあふそ
梅花といづれは昔のいづれは昔のいづれは昔のいづれ
人のよれは昔のいづれは昔のいづれは昔のいづれ
あふそいづれは昔のいづれは昔のいづれは昔のいづれ
也のあふそいづれは昔のいづれは昔のいづれは昔のいづれ
花乃いづれは昔のいづれは昔のいづれは昔のいづれ

ある花をよみしむるに池のほとりには

かきつばたの葉のひかり

あはれよる涙のまじりたるよはるの

うらみのなみちよはるの松の影

人のやまひたる

美世へいづへの松をいづよりきよ

雪乃庭よみてあり

^拾よるよる月とらんまじり我をたを

延元十七年八月直首ふよりりて

人びとあききりたり梅の花を

^梅梅うえよゆりりありてる白雪

つらき心と人とのあはれを

高のよみしむるに池のほとりには

松影のいたるよはるの松の影

人のあききりたるよはるの

えのよみしむるに池のほとりには

あはれよる涙のまじりたるよ

うらみのなみちよはるの松の影

人のやまひたる

美世へいづへの松をいづよりきよ

雪乃庭よみてあり

よるよる月とらんまじり我を

人びとあききりたり梅の花を

梅うえよゆりりありてる白雪

池水よと記する者の思ふにはのこし^上り^はく^はん^はん^はん

九月はこゆり

白雲のしらけよと記する者の思ふにはのこし^上り^はく^はん^はん^はん

貫之集第二

延喜十八年二月廿四のみこれとあはる

屏風のしらけよと記する者の思ふにはのこし^上り^はく^はん^はん^はん

正月 八首

しらけよと記する者の思ふにはのこし^上り^はく^はん^はん^はん

二月

よ家よと記する者の思ふにはのこし^上り^はく^はん^はん^はん

三月

しらけよと記する者の思ふにはのこし^上り^はく^はん^はん^はん

七月

萩のしらけよと記する者の思ふにはのこし^上り^はく^はん^はん^はん

八月

あまのつばき花のつぼみはかきつばたのつぼみ

九月

いづれとて花はさかしくも花のあはれはなほ

十月

あられなる花はなほさかしくも花のあはれはなほ

十二月

こけより風は清くも花のあはれはなほ

延喜十八年四月東宮乃侍屏風さくらの

花のあはれはなほさかしくも花のあはれはなほ

るいづれとて花はさかしくも花のあはれはなほ

池乃花はさかしくも花のあはれはなほ

水乃花はさかしくも花のあはれはなほ

さくらの花はさかしくも花のあはれはなほ

けしきさかしくも花のあはれはなほ

七月はさかしくも花のあはれはなほ

天のあはれはさかしくも花のあはれはなほ

あまのつばき花のつぼみはかきつばたのつぼみ

あまのつばき花のつぼみはかきつばたのつぼみ

あまのつばき花のつぼみはかきつばたのつぼみ

花のあはれはさかしくも花のあはれはなほ

あまのつばき花のつぼみはかきつばたのつぼみ

七月十一日 土曜

夏衣を着て山へ出た。山の上は風が吹いておもしろい。山頂へ上ると、

ふたふたの雲が流れて、山頂は霧に包まれている。おもしろい。おもしろい。おもしろい。

七月十一日 土曜
山頂へ上ると、ふたふたの雲が流れて、山頂は霧に包まれている。おもしろい。おもしろい。おもしろい。

八月八日 土曜
八月八日 土曜
八月八日 土曜
八月八日 土曜

八月八日 土曜
八月八日 土曜
八月八日 土曜
八月八日 土曜

九月一日 日曜

九月一日 日曜
九月一日 日曜
九月一日 日曜
九月一日 日曜

十月一日 日曜

十月一日 日曜
十月一日 日曜
十月一日 日曜
十月一日 日曜

十一月一日 日曜

十一月一日 日曜
十一月一日 日曜
十一月一日 日曜
十一月一日 日曜

十二月一日 日曜

十二月一日 日曜
十二月一日 日曜
十二月一日 日曜
十二月一日 日曜

上十首

かきつばたのうらみはしほのうらみのうらみ
あつたうらみ

あつたうらみのうらみはしほのうらみのうらみ
あつたうらみ

あつたうらみのうらみはしほのうらみのうらみ
あつたうらみ

あつたうらみのうらみはしほのうらみのうらみ
あつたうらみ

あつたうらみのうらみはしほのうらみのうらみ
あつたうらみ

あつたうらみのうらみはしほのうらみのうらみ
あつたうらみ

あつたうらみのうらみはしほのうらみのうらみ
あつたうらみ

秋さう野

あつたうらみのうらみはしほのうらみのうらみ
あつたうらみ

あつたうらみのうらみはしほのうらみのうらみ
あつたうらみ

あつたうらみのうらみはしほのうらみのうらみ
あつたうらみ

あつたうらみのうらみはしほのうらみのうらみ
あつたうらみ

花の香もけしきもあはれぬをよみて
 せむのしるしをよみて
 花の香もけしきもあはれぬをよみて
 はらのけしきもあはれぬをよみて
 花の香もけしきもあはれぬをよみて
 せんせいのしるしをよみて
 ちるしにけしきもあはれぬをよみて
 人の香もけしきもあはれぬをよみて
 花の香もけしきもあはれぬをよみて
 せんせいのしるしをよみて
 ちるしにけしきもあはれぬをよみて
 人の香もけしきもあはれぬをよみて
 花の香もけしきもあはれぬをよみて
 せんせいのしるしをよみて

延長四年九月信皇の御幸平賀京々の

やまをさるりのしるしをよみては屏風を
さし十一首りぬ

花の香もけしきもあはれぬをよみて
 せんせいのしるしをよみて
 ちるしにけしきもあはれぬをよみて
 人の香もけしきもあはれぬをよみて
 花の香もけしきもあはれぬをよみて
 せんせいのしるしをよみて

糸ろひ

花の香もけしきもあはれぬをよみて

花の香もけしきもあはれぬをよみて

花の香もけしきもあはれぬをよみて

花の香もけしきもあはれぬをよみて

花の香もけしきもあはれぬをよみて

此の人の心は初めの花とていふに我や如く人
 の心は花の心とていふに花は人の心とていふに
 年月は人の心とていふに人の心は年月とていふに
 久方の月とていふに月も久方の心とていふに
 はあつた心とていふに心はあつた心とていふに
 心はあつた心とていふに心はあつた心とていふに
 心はあつた心とていふに心はあつた心とていふに
 心はあつた心とていふに心はあつた心とていふに
 心はあつた心とていふに心はあつた心とていふに

貫之集第二

延喜寺内裏の屏風なるに九十六首元日

~~~~~

~~~~~

人なるもの心なる心

我家よりとみふの梅の花をよみよありけり

~~~~~

~~~~~

野にちりて人なる心とていふに心はあつた心とていふに

~~~~~

~~~~~


Handwritten text in cursive script, top line.

Handwritten text in cursive script, second line.

Handwritten text in cursive script, third line.

Handwritten text in cursive script, fourth line.

Handwritten text in cursive script, fifth line.

Handwritten text in cursive script, sixth line.

Handwritten text in cursive script, seventh line.

Handwritten text in cursive script, eighth line.

Handwritten text in cursive script, ninth line.

Handwritten text in cursive script, tenth line.

Handwritten text in cursive script, eleventh line.

考

追尋十年十月日廿八日迄の足尾銅毒害
⁴⁵白濁の病に罹りて死す者甚多し其病は
⁴⁶死す者甚多し其病は死す者甚多し其病は

追尋十年十月日廿八日迄の足尾銅毒害

追尋十年十月日廿八日迄の足尾銅毒害

追尋十年十月日廿八日迄の足尾銅毒害

追尋十年十月日廿八日迄の足尾銅毒害

追尋十年十月日廿八日迄の足尾銅毒害

追尋十年十月日廿八日迄の足尾銅毒害

追尋十年十月日廿八日迄の足尾銅毒害

春

いふ人あつてもうのり人少る雪は花よのこころ教まらひ
とていふもあはれいねを梅花と結ひ雪のこころあつて
心のかんじなむとあはれいふのこころいふはあはれいふ
白雪のこころいふのこころいふのこころいふのこころいふ
兼平五年九月車と糸のみこの唐和乃七
れみこのあはれ取乃八十賀入せり秋時屏風
のこころいふはあはれいふ

ちるやあはれいふのこころいふのこころいふのこころいふ
乃折人少るのたんとく馬とあはれいふ
あはれいふのこころいふのこころいふのこころいふのこころいふ
きひ人のこころいふのこころいふのこころいふのこころいふ

あはれいふのこころいふのこころいふのこころいふのこころいふ
九月九日たけいふの女菊とあはれいふのこころいふのこころいふ

あはれいふのこころいふのこころいふのこころいふのこころいふ
竹は雪乃あはれいふのこころいふのこころいふのこころいふ

^拾白雪はあはれいふのこころいふのこころいふのこころいふのこころいふ
兼平又兼平十二月内表は屏風のこころいふのこころいふ
あはれいふのこころいふのこころいふのこころいふのこころいふ
あはれいふのこころいふのこころいふのこころいふのこころいふ

あはれいふのこころいふのこころいふのこころいふのこころいふ
子母して車のこころいふのこころいふのこころいふのこころいふ
人あはれいふのこころいふのこころいふのこころいふのこころいふ

白雪のうしろのうしろのうしろのうしろのうしろ
野のうしろ

秋のうしろのうしろのうしろのうしろのうしろ
野のうしろ

昔のうしろのうしろのうしろのうしろのうしろ
水のうしろ

何のうしろのうしろのうしろのうしろのうしろ
人のうしろ

舟のうしろのうしろのうしろのうしろのうしろ
人のうしろ

たのうしろのうしろのうしろのうしろのうしろ

年をうしろのうしろのうしろのうしろのうしろ
くれぬうしろのうしろのうしろのうしろのうしろ
秋をうしろのうしろのうしろのうしろのうしろ

たのうしろのうしろのうしろのうしろのうしろ
水のうしろ

野のうしろのうしろのうしろのうしろのうしろ
野のうしろ

野のうしろ

昔のうしろのうしろのうしろのうしろのうしろ
昔のうしろ

舟のうしろのうしろのうしろのうしろのうしろ
舟のうしろ

貫之集第四

元慶三年四月右大臣將殿此屏風の御世首
人の家こそいとあり

恒盛新恒

これおと父といへく梅のむらさきとくみかたけりたる
をんれ柳とては

まほのまゆこもねのなまねとまきのくらもあふ満るらん
あつたふいりれり

は祝 左京雅正

花のまらぬまよひのなつよつ柳も松の
みさう成あり
と里ふたふと母とる

ゆきらぬかまきしうきとれは柳をうらねたふりりり
海のかきりよ風吹及なり

Handwritten text in cursive script, top line of the right page.

Handwritten text in cursive script, second line of the right page.

Handwritten text in cursive script, third line of the right page.

Handwritten text in cursive script, fourth line of the right page.

Handwritten text in cursive script, fifth line of the right page.

Handwritten text in cursive script, sixth line of the right page.

Handwritten text in cursive script, top line of the left page.

Handwritten text in cursive script, second line of the left page.

Handwritten text in cursive script, third line of the left page.

Handwritten text in cursive script, fourth line of the left page.

Handwritten text in cursive script, fifth line of the left page.

Handwritten text in cursive script, sixth line of the left page.

鳴鹿ハツクニシテ一ノ秋ゆゑに心は静かきを
とてふあゝの歌なり

とてふあゝの歌なり

九月

時多し秋月こそはしづかしの心は静かき
雨多し秋月こそはしづかしの心は静かき
少る秋月こそはしづかしの心は静かき
水乃たしづかしの心は静かき

花とらふ歌は今もあつてはしづかしの心は静かき

十二月はしづかしの心は静かき

花とらふ歌は今もあつてはしづかしの心は静かき

同年同七月左衛門督殿屏風乃まゝ十又

首正月九日人々あつてはしづかしの心は静かき

とてふあゝの歌なり

若らも秋はあつてはしづかしの心は静かき

二月はしづかしの心は静かき

とてふあゝの歌なり

とてふあゝの歌なり

とてふあゝの歌なり

三月はしづかしの心は静かき

とてふあゝの歌なり

おのづからくはるる花のさきかきつる花のさきかきつる花

日月池乃ちたゞのなれ花

水底に影さくさく花のさきかきつる花のさきかきつる花

なほさきかきつる

あつちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

七日

しつる花のさきかきつる花のさきかきつる花のさきかきつる花

なほさきかきつる

暮らさるる花のさきかきつる花のさきかきつる花のさきかきつる花

なほさきかきつる

おのづからくはるる花のさきかきつる花のさきかきつる花

おのづからくはるる花のさきかきつる花のさきかきつる花

なほさきかきつる

おのづからくはるる花のさきかきつる花のさきかきつる花

なほさきかきつる

おのづからくはるる花のさきかきつる花のさきかきつる花

なほさきかきつる

おのづからくはるる花のさきかきつる花のさきかきつる花

なほさきかきつる

おのづからくはるる花のさきかきつる花のさきかきつる花

おのづからくはるる花のさきかきつる花のさきかきつる花

おのづからくはるる花のさきかきつる花のさきかきつる花

井戸

井の底は深きと云ふ事多し
井の底は浅きと云ふ事多し
井の底は深きと云ふ事多し
井の底は浅きと云ふ事多し

七ツ

夕方に井戸を掘りて
後には井戸を掘りて
夕方に井戸を掘りて
後には井戸を掘りて

井戸を掘りて
井戸を掘りて
井戸を掘りて
井戸を掘りて

井戸を掘りて
井戸を掘りて
井戸を掘りて
井戸を掘りて

井戸を掘りて
井戸を掘りて
井戸を掘りて
井戸を掘りて

井戸を掘りて
井戸を掘りて
井戸を掘りて
井戸を掘りて

井戸を掘りて
井戸を掘りて
井戸を掘りて
井戸を掘りて

井戸を掘りて
井戸を掘りて
井戸を掘りて
井戸を掘りて

いづれ人の心をなすてしをわたりて

草花の風をまじりてなするをよそとてなする心なるをよそとて
よそとて人の心をなすてしをわたりて
いづれ人の心をなすてしをわたりて

あはれ

いづれ人の心をなすてしをわたりて
あはれ

いづれ人の心をなすてしをわたりて
あはれ

いづれ人の心をなすてしをわたりて

同四年正月右大臣將政乃は屏風の寄十二
首元日人の家よほせとあまのこまりある
いづれ人の心をなすてしをわたりて
あはれ

いづれ人の心をなすてしをわたりて
あはれ

いづれ人の心をなすてしをわたりて

よき世の中はまほしき

いかに世をたのむか
よき世の中はまほしき
舟よのついでに人あるはよき物
いかに世をたのむか
か^拾らば世はまほしき
よき世の中はまほしき
よき世の中はまほしき
よき世の中はまほしき
よき世の中はまほしき
よき世の中はまほしき

秋の紅葉はまほしき
女もよのちまほしき
よき世の中はまほしき

月影のまほしき
よき世の中はまほしき
よき世の中はまほしき
よき世の中はまほしき
よき世の中はまほしき
よき世の中はまほしき

よき世の中はまほしき
よき世の中はまほしき
よき世の中はまほしき
よき世の中はまほしき
よき世の中はまほしき
よき世の中はまほしき

あつらひの月うらたは屏風のまじりうら
廿八首元日雪あけり

うらたは雪あけりちあけりちあけりちあけり
子

あつらひの月うらたは屏風のまじりうら
あつらひの月うらたは屏風のまじりうら

梅の花もさきさきちりけりかきさきさきさきさきさきさきさき
あつらひの月うらたは屏風のまじりうら

あつらひの月うらたは屏風のまじりうら
あつらひの月うらたは屏風のまじりうら

あつらひの月うらたは屏風のまじりうら
あつらひの月うらたは屏風のまじりうら

あつらひの月うらたは屏風のまじりうら
あつらひの月うらたは屏風のまじりうら

あつらひの月うらたは屏風のまじりうら
あつらひの月うらたは屏風のまじりうら

あつらひの月うらたは屏風のまじりうら
あつらひの月うらたは屏風のまじりうら

あふくはなをばかすもしむるはたかかきしむるはなをばかす

又月五日

鳥の音にあふくはなをばかすもしむるはたかかきしむるはなをばかす
いづれはなをばかす

我々の声よのさかすはなをばかすもしむるはたかかきしむるはなをばかす
人の声よのさかすはなをばかす

かきよのさかすはなをばかすもしむるはたかかきしむるはなをばかす
かきよのさかす

かきよのさかすはなをばかすもしむるはたかかきしむるはなをばかす
かきよのさかす

かきよのさかすはなをばかすもしむるはたかかきしむるはなをばかす

あふくはなをばかす

あふくはなをばかすもしむるはたかかきしむるはなをばかす
あふくはなをばかす

八月十六夜

あふくはなをばかすもしむるはたかかきしむるはなをばかす

九月九日

あふくはなをばかすもしむるはたかかきしむるはなをばかす
あふくはなをばかす

九月九日

あふくはなをばかすもしむるはたかかきしむるはなをばかす

草と木も花をうつらぬとてふよしは林の音ぬららふとてはなり
跡乃らさく

花さける菊よはあれや神宵月時由そ花の文は深なる
い糸のつらさを

かりそちんちんといふ花のつらさを
あはれ

つらさのつらさを
つらさ

雪ふれさるもあはれとて人の衣をかじり花を返ける
松とてけしあや

松もこれ竹もあやとて花のつらさを

とらさく

此月日に花をうつらぬとては林の音ぬららふとてはなり
同又草と木も花をうつらぬとては林の音ぬららふとてはなり

あはれとては林の音ぬららふとてはなり
みよの若花はつらさを
つらさを
あはれとては林の音ぬららふとてはなり
水のあはれとては林の音ぬららふとてはなり
春霞とては林の音ぬららふとてはなり
ちんちんといふ花のつらさを
桜花よりよはあれや神宵月時由そ花の文は深なる

夜あきのさきうらさく神宮跡地乃座も花を吹く
花をうらさくつくとてはうらさくつくと
うらさくつくとつくとつくとつくと
あやうらさくつくとつくとつくとつくとつくと
あやうらさくつくとつくとつくとつくとつくと
あやうらさくつくとつくとつくとつくとつくと
あやうらさくつくとつくとつくとつくとつくと
あやうらさくつくとつくとつくとつくとつくと
あやうらさくつくとつくとつくとつくとつくと
あやうらさくつくとつくとつくとつくとつくと

と若野のふらふらありよ、水のみをさつと
たつとつとつとつとつとつとつとつと

元日書ふたつとつと

白あはつとつとつとつとつとつとつと
あはつとつとつとつとつとつとつと
あはつとつとつとつとつとつとつと
あはつとつとつとつとつとつとつと
あはつとつとつとつとつとつとつと

九月九日

あはつとつとつとつとつとつとつと
あはつとつとつとつとつとつとつと
あはつとつとつとつとつとつとつと
あはつとつとつとつとつとつとつと

ਸਰਕਾਰੀ ਆਦਿ ਆਗੂਆਂ ਦੀ ਸੇਵਾ ਵਿਚ ਸਮਝਦਾਰੀ

ਪੜ੍ਹ

ਜਿਸ ਵਿਚ ਸਰਕਾਰੀ ਆਦਿ ਆਗੂਆਂ ਦੀ ਸੇਵਾ ਵਿਚ ਸਮਝਦਾਰੀ

ਮਿਸਤਰੀ

ਜਿਸ ਵਿਚ ਸਰਕਾਰੀ ਆਦਿ ਆਗੂਆਂ ਦੀ ਸੇਵਾ ਵਿਚ ਸਮਝਦਾਰੀ

ਮਿਸਤਰੀ

ਜਿਸ ਵਿਚ ਸਰਕਾਰੀ ਆਦਿ ਆਗੂਆਂ ਦੀ ਸੇਵਾ ਵਿਚ ਸਮਝਦਾਰੀ

ਮਿਸਤਰੀ

ਜਿਸ ਵਿਚ ਸਰਕਾਰੀ ਆਦਿ ਆਗੂਆਂ ਦੀ ਸੇਵਾ ਵਿਚ ਸਮਝਦਾਰੀ

ਮਿਸਤਰੀ

ਜਿਸ ਵਿਚ ਸਰਕਾਰੀ ਆਦਿ ਆਗੂਆਂ ਦੀ ਸੇਵਾ ਵਿਚ ਸਮਝਦਾਰੀ

ਮਿਸਤਰੀ

ਜਿਸ ਵਿਚ ਸਰਕਾਰੀ ਆਦਿ ਆਗੂਆਂ ਦੀ ਸੇਵਾ ਵਿਚ ਸਮਝਦਾਰੀ

ਮਿਸਤਰੀ

以相傳之本書寫授合了
消字亦如本也

建長元年八月日

藤原朝臣
別

14

以相傳之本書寫授合了
消字亦如本也

建長元年八月日

藤原朝臣
判

